〔2011年度学部等研究教育補助金等報告〕

トルコのカーヌーンにおける微分音表現

松本奈穂子*

I. はじめに

トルコの古典音楽演奏において重要な楽器の一つであるカーヌーンは，他の古典音楽楽器にくらべて，大きな相違点がある。それは求められる音高を得るための技術獲得法が，比較的容易であるということである。

これはカーヌーンの構造的な特性に起因する。求められる音高を得るための技術獲得を容易にしている大きな構造的特性としては，コースとマンダルという，すでに固定された音高を出すための機能の存在が挙げられる。ケメンチェやウードといったフレットが無く，一つの弦で複数の音高を出す機能をもつリュート系楽器では，求められる音高を正しく演奏できるようになるまでに，時間がかかる。その音高を出すための視覚的目印が無いため，勘所を学習しなければならないからだ。

これに対して，カーヌーンでは，各コース[1)]は一つの音高しか割り当てられていない。そのため，調弦さえきちんとすれば，各音高は弾くだけで，求めることができる。また，各コースごとに設置されているマンダルを所定の数だけ操作すれば，微分音も求めることができる。勘所の習得ではなく，すでに備わっている諸機能の操作習得が必要となってくるのである。このマンダル操作による微分音表現について本稿では，主要マカームにおける典型的な操作法のみをとりあげることにする。とりあげるマカームはウッシャーク，ヒジャーズ，ラースト，キュルディーの４つである。また，いずれもマカーム第一音をカーヌーンにおける「ラ」とする。ただし，それぞれのマカーム構成音列は互いに重複しあっており，これらのマカーム内では第一音列のみをとりあげれば，第二音列も理解できるようになるので，第一音列のみに言及することとする。カーヌーンのマンダルの数は小柴；松本2011でも述べているように工房によって取り付け方が異なるが，本稿では，12マンダル，すなわち１コースに最大で12個のマンダルがとりつけられ，６個ずつフラットとシャープに割り当てられるタイプのカーヌーンにおけるマンダル操作を例とする。マンダル操作はトルコ人カーヌーン演奏家ハリール・カラドゥマンHalil Karaduman 氏の教則本および彼との面談調査の結果に基づく。

提出日2012年９月26日　　受理日2012年11月28日
＊教養学部芸術学科音楽学課程准教授

II. 主要マカームごとの微分音に関わるマンダル操作

まずウッシャーク・マカームについて述べる。当該マカームは，第一音列のウッシャーク音列第二音すなわち「シ」が重要な鍵となる微分音である。楽譜表記上は，第二音はコマ（9分の1音）のフラットとなるが，カーヌーンでは，フラットに割り当てられる6つのマンダルのうち左から3つ目，および4つ目までを起こす形で表現される。

ヒジャーズ・マカームは，第一音列のヒジャーズ音列第2音「シ」で，フラットの6つのマンダルのうち一番左の一つだけを起こす形，第3音「ド」でシャープの6つのマンダルのうち一つだけを倒す形で表現される。

ラースト・マカームは第一音列のラースト音列第3音「ド」で，シャープの6つのマンダルのうち一つだけを倒す形で表現される。

キュルディー・マカームは第一音列のキュルディー音列第2音「シ」で，フラットの6つのマンダルのうち一つだけを起こす形で表現される。

III. 今後の展望

より多くのマカームについて，マンダルにおける微分音表現を精査する必要がある。また，演奏家によっても，異なる選択をする場合があるので，事例研究の積み重ねが必要である。

なお，本研究に基づく成果の一部は，2012年3月出版の東海大学教養学部紀要第42号「トルコ古典音楽におけるマカーム構造――構成音列の多面的様相を中心に」においても公表している。

注

1）カーヌーンではピアノ同様，一つの音高に3つの弦が割り当てられている。この3つの弦のまとまりをコースと呼ぶ。